石川県石川郡手取川流域村落に みられた住民の自然認識（1）

広瀬　鎮　名古屋学院大学

COGNITION FOR NATURE, APPEARED AMONG REGIDENTS AT ALONGSIDE OF RIVERS IN ISHIKAWA PREFECTURE

Shizumu HIROSE, *Nagoya gakuin University*

－鳥越村の近代化と住民意識の変化－

今日，石川県石川郡鳥越村地区の近代化は，自然環境の二大変化によって住民層，とくに高齢者間に強く印象づけられているといえよう。一つは，大日川上流域のダム設置および，それにともなう流域の護岸用水等の諸工事，さらに一つは村内における広巾の道路の付設，拡張と急速な自動車の普及である。これらは，白山麓帯の自然環境の変化を明確に知覚せしめる現象となって迫り（石川県白山

表1　鳥越村の自動車の普及

㊊	人力車	自転車	荷（積）車	荷(積)馬車	自動車			発動機付自転車
					荷積用	乗用	小型	
昭和2	1	81	38	46	4			
3	1	87	38	46	4			
4		98	37	31	1			
5		87	18	36	1			1
6		146	48	28	1			
7		122	40	28	1			1
8		148	71	28	1			1
10		189	111	20	1	2	1	
14			35	15	1		1	

㊐	普通車			小型四輪車		小型三輪車		その他	125 cc以下の原動機つき自転車	軽自動車		特殊用途車	特殊車
	乗用	乗合	貨物	乗用	貨物用	乗用	貨物			乗用	貨物		
昭和35		1	6	5	8		12	55					
36			13	11	13		15	4					
37			14	11	17		16	4					
39									365				
40	59		89	10	56		9		※ 429	10	65		
41	65	2	92	16	112		－		※ 446	16	112	32	119
42	2		34	93	141		3		446	16	112	5	－

鳥越村村勢一覧による。　※バイク以上二輪車

自然保護センター,1988），そこに，かつてみられた生物相の何等かの形の変化が惹起され，この事を聞き取りのインフオーマント（情報提供者）およびアンケート回答者が明確に指摘している。鳥越村の近代化の進むなかで，大日川，および手取川への関心は高く，とくに汚染・水量減少，魚類の激減は，いずれの者も挙げている。だが，流域に住む高齢者が，川に対する恐れを顕著に示さず，近年の土木費支出にみられる災害対策行政への期待認識は高く，町の河川行政への評価は高い。下吉谷住のN氏（71才）によれば，河川汚染の原因に生活汚水，ゴミ・不用品等の投棄等をあげているが，インフオーマントN氏の他，大日川流域に少年期をくらした者たちは，大日川における小学校齢期における集団川遊びの体験を有していた。そしてこれら子供集団のあそびの形態も，村落ごとにその人数，年令等構成メンバー，さらに川岸の地形等の違いによってそれぞれ相違のあったことがあげられるが，概して昔は，子供の数が多かったのである。本論では，環境認識を自然対応のうちにとらえ，自然認識の実態を通じて，住民の自然観の形成過程を，住民の生活体験および，学校，社会における学習と係って明らかにするものであるが，調査後の考察は，認識人類学研究の手法にたつフイールドワークにおいての聞き取り，また，アンケート等によって収録した資料にもとづいている。大日川および手取川流域の各村落社会における残留伝承に現れる自然認識は，今後の調査の展開とともに集団化された形で継続報告を予定しているものである。

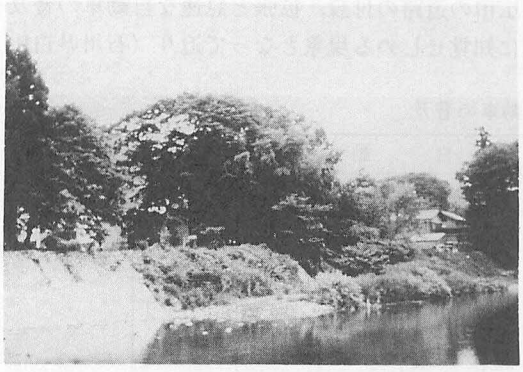


写真1　大日川岸の自然－子供の遊び場ではなくなった.

写真2　竹藪　鳥越村下吉谷
子供たちは山頂から下地まで竹藪の中を一度も地面に着地することなく下までおりることができた.

鳥越村内の哺乳動物伝承

鳥越村の自然はどのように変わってきたのであろうか。哺乳動物に係る伝承の収録のよって，村内の自然環境の変遷を知ることができる。それは，サルをはじめとするクマ，タヌキ，キツネ，アナグマ等の各種動物は，それぞれが，環境指標性を有しているからである。

すでに，1986年，鳥越村にみられる哺乳動物と住民生活の自然史動態の一つとして，左礫地区住民間の動物への関心についてふれたが（広瀬,1980）今回の調査では，河川生活を中心としたため魚類との係りや，その自然知識が多く収録された。川遊び，魚とり，日常生活を通じて上述N氏はウグイ他7種，三ッ屋野のS氏（59才）は5種，上吉谷のM氏（66才）は2種をあげている。年令および生活域と魚類名の知識との相関が必ずしも高いとはいいえないが，S氏はゴリおよびドジョウのみられなくなった点を取り上げている。

S氏は，大日川の汚染現状に加えて，川に対する恐れを認識しており，自然畏敬の古くからの民間

伝承を継承していた。古くからの自然畏敬や，生き物に霊魂を感じる生活態度は，現在全く失われているように思われていたが，S氏には，伝承ではあるが，認識の継承がみられたのである。年令集団ごとに，このような自然に係る伝承の継承には，特色ある残留が認められるのである（岡谷，1987）

河原山のK氏（64才）によれば，こわい動物としてあげられたのはクマであった。鳥越村内に今日では，ほとんどその姿を見ることのない動物でありながら，今なおクマが恐れられていたのである。知っている哺乳動物としては，キツネ，テン，ウサギがあげられる。その中にニホンザルが加えられていない点には注目しなければならない。このことは，インフオーマントM氏のこわい動物として挙げられたトカゲ，ムカデとも異っており，個人の認識の差を示すものとしてまことに興味ふかいといえよう。既知の動物として，M氏は，ウサギ他3種の動物を挙げており，これはS氏の挙げる4種とは，種類数において大差はみられないのであるが，インフオーマントN氏は，哺乳動物として既存のもの，身辺にみる動物として，モグラ，ネズミの2種を記しており，とくに嫌いな動物にネズミを挙げている。ここでとりあげられたのは，モグラ，ウサギ，タヌキ，キツネ，テン，クマ，ニホンザル，イタチの8種類の哺乳動物であるが，インフオーマントのいずれもが，狩猟体験者，狩猟者ではないことに注目したいのである。インフオーマントは，いずれも長期にわたる教職者であった。他の鳥類については，他の論考において報告するが，明らかに既知の動物種が多いのである。こうして，動・植物をめぐる住民の認知度をそれぞれの種名列挙によって考察を進めると，圧倒的に多くの種名をあげている植物（栽培種・野菜を含め）と，くらべると，鳥越村の高齢者間における動物・植物の知存度には，やはり，人生体験（ライフ・ヒストリー）と係った相違のあることが，認められるのである。

植物に係るアンケートについては，“身のまわりの植物を知っているだけ書いてください”，“自然について特別に教えてもらったことがありますか”という2項目あげて尋ねたのであるが，回答の多くが，自家栽培の野菜名があげられており，インフオーマントや回答者の多くの自然接触の場の多いことがいかがえるのである。しかしながら，問いかけの“知っている山菜”に対する回答をみると，ゼンマイ，ワラビ，ソバナ，ウラジロ，アザミ，ヨメナ，タラの芽，フキ，カタハ，イタドリ，ヤマワサビ，セリ，ミツバ，ウドがインフオーマント3名から挙げられており，関心の高さを知ることができたのである。

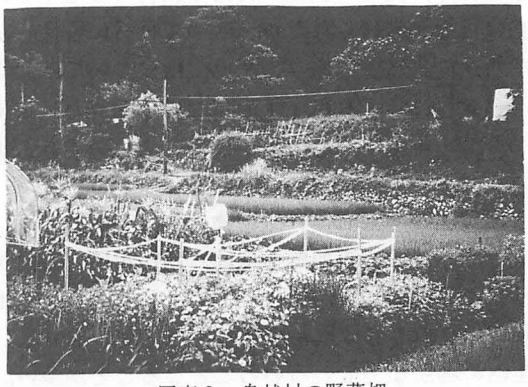


写真3　鳥越村の野菜畑

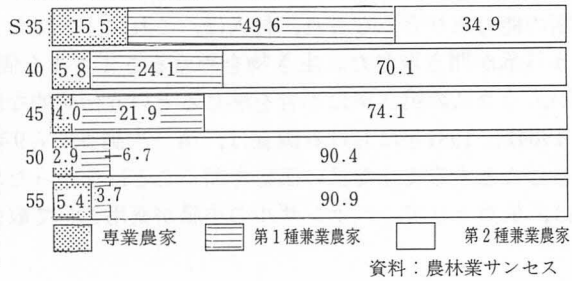
鳥越村における専兼業別農家数の年々の変化をみると，1975年以後急速に第2種兼業農家が増加するのであるが，農耕者のもつ兼業化は環境そのものの変化を示しているのである。

表2　専兼業別農家数と専兼業別農家数構成比

専兼業別農家数　（単位：戸）

年	総数	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家
昭和35年	935	145	464	326
40	864	50	208	606
45	804	32	176	596
50	760	22	51	687
55	721	39	27	655

専兼業別農家数構成比（%）



資料：農林業サンセス

白山麓民俗調査と鳥越

白山麓においては，かつての焼畑，出作り耕作が，次第に消えつつあるが，焼畑耕作者間には長く，ニホンザルによってもたらされた被害に対する「猿嫌悪・拒否」の伝承が多くのこされていた地帯が存在しているかと思えば，吉野谷村吉野地区のごとく，タヌキ・キツネ等が，嫌われてきた地域も存在している（広瀬，1984b)。地域による野生動物の評価は，決して一率ではないことに留意して調査してみると，例えばニホンザルにしても，その毛皮の評価などは，頭の黒焼きのごとき共通した薬用効果を認め，高価値性を有したものとは，およそことなって，中宮地区などはサルの毛皮はあまり，価値を認めなかった（広瀬，1981)。

鳥越村地区住民からの地区内生息の野生動物や過去に生息していた動物に関する民間伝承の収録は，1978年左礫地区調査から始めたのであるが，同地区聞き取りによって大日川流域の村落には，すでにもうこの期にはニホンザルの姿を見ることは，ほとんどなかったのである。しかしながら左礫の中田市太郎氏は，1978年の調査時，サルに係る気象予知俚諺の記憶を有していた。これは，昭和初期ニホンザルの出没がほとんどみなくなって以来50年余にわたって，ニホンザルについての伝承が継承されていたのである。このように記憶される言葉もまた，地域社会における文化なのである。もともと，環白山麓帯の人・自然・生きものにかかわる人文科学研究調査の開始時点において重視した環境指標としてのサルをめぐる地域情報を地元情報提供者から収集しはじめたのは，1970年代であった。とりわけ，大日川流域の村落中杖村のごとくダム建設による村民の離村，移住の結果，左礫地区の調査に目標が向けられたが，かつて杖村に居住した人びとを追っての金沢市，湯谷での聞き取りによって村民の自然との係りの深い生活については記録することができた（広瀬，1979)。

鳥越村は，大日川・手取川にはさまれた地域や福井県境につながる山地帯に住む人々の環境利用についての生活実態を明らかにすることのできる場所の一つであり，動物民俗調査の適地だったといえる。

地域住民の生活と野生動物との係りは，とくに野生動物の分布をめぐる住民の認識によるところが大であって白峰の加藤勇京は，1976年に“人間が入り込んだのでサルがいなくなった。”“イノシシは狩りつくされたがサルについては明らかに地域を去った”のであると主張していたが（広瀬，1984a)このことは重要な発言であったのである。ニホンザルの里地への出没についても家族集団や，生活の場所などでいろいろことなることが多い。中宮の林与享・林のぶによれば，1972年出没するサルへの理解は高く，人々もサルを恐れていない。1978年の調査では「串ざしにしてあぶってたべる」サル食用法についての記録を得ることが出来た。しかし，人々の野生ニホンザルとの出会いは極端に少なかったのである。

1985年，12月の左礫地区調査時では，身の回りの動物として話題となったのはムジナであった。これは，同地区に出現した廃屋にムジナが住みつき，畑作への害を及ぼすことが頻繁となってきたからである（広瀬,1986)。同地区では，このようなまことに新しい動物情報とともに，家畜牛は有毒茸識別の能力ありとみなされ，村人は，これによってキノコの毒性の有無を判別する手掛かりとしたという口承が聞き取れた。生き物をめぐるさまざまな価値認識がこのような形で存在しているのであるが，カラスの鳴き声に不吉を感じるという伝統的な認識伝承が若い世代へも継承されていた（中村，1984)。1981年における調査は，第一次調査から9年経過していたが，ニホンザルを人々の心のよりどころとするような云い伝えを聞くことはなかったのであるが，左礫地区以外の地区，中宮においては，依然として，ニホンザルの小腸が薬用として取引されたこと，薬用法の一つとしてサルの小腸を

干したものを腹に巻くことにより安産を期待した呪用例が，伝えられていた。とくに同地区の外一次氏（故人）は，蛇谷ニホンザルの行動の変化を指摘したインフォーマントの一人であるが，サルが人間との接触のうちに人慣れをおこして，人間がそこに居ることがかえって安心であり，煙をみるとこれまで近づかなかった野生のサルたちが，煙を恐がらなくなった等のニホンザルの生態変化を語っている。

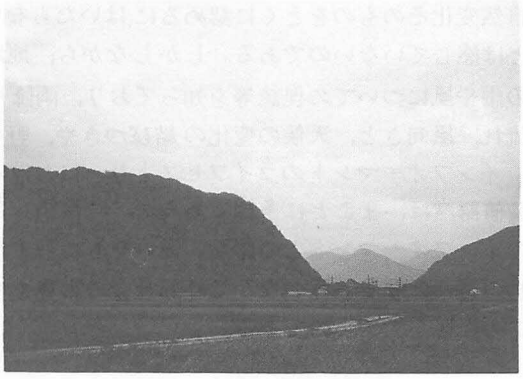


写真4　鳥越村より白山を望む

戦後のニホンザル狩猟やカモシカ猟の禁止以後，人間の側の野生動物への対応が，彼等の生態行動に影響を与えつつあったこととして注目したいのである。

1785年，金子鶴村「白山遊覧図」における天明5年（1765年）の尾添村でのサルの大群の北へ向かう移動は，大雪の予兆とされている。中宮では，ハライ谷上流をサルが，渡ると大雪，また，タイコの谷へサルが移動すると降雪，などの天気予兆俚諺が，収録されてきたが，蛇谷一帯のサルは，雪をいやがっていると外一次氏は語っていた（広瀬1979）。環境に適応した野生動物の行動については，白山調査研究委員会動物班の諸研究に明らかとなっているが，以上のようなインフォーマントを通じての認識も重要な情報となっていると考えている。

自然価値観の変動

すでに試みてきた鳥越村での教職体験の高齢インフォーマントからの聞き取りも5年を経過し，聞き取り情報も多岐にわたってきているのであるが，本論では，インフォーマントの少年期における体験をもとに，戦前，戦後にわたる自然価値観の変動の一端に迫ってみよう。最初に述べた，大日川流域の諸環境の変化および，村内道路の急速な変化は，住民の生活そのものを変化させ，物質観念の形成にももろもろの影響を与えてきている。自然環境の変化の知覚の上に立って考えられる「飲料水」に関する，聞き取りにおいて，鳥越村は，『弘法の池』他各所に清水湧出の「清水場」への関心度のきわめて高い地域であるが，そこにおいても，水質そのものが，味覚認識面において“変わった”と感じているものが現れていることは，注目されねばならないと考えている（栗本，1984）。

三ッ屋野のＳ氏は，水の味の変化を感じとっている一人であるが，鳥越村周辺域の道の変化，車による排気ガスの増加等の指摘があり，環境の変化に対応した自然把握は，他のインフォーマントに比して極めて敏感であるといわざるをえないのである。もともと，自然価値そのものもインフォーマント個々によっても異なり，その認識の領域も広いのであるが，居住地域の環境の変化とは，深い係りを有しておりながら，必ずしも，環境変化の知覚とは，相関していないのである。下吉谷地区のＮ氏の場合，車は，10年あまり前から増加し，大きな道ができたが，

写真5　鳥越村釜清水の引法の池
他地方からも水を汲みにくる

自然変化そのものをとくに認めるにはいたらない。そして，居住環境内の水の味も，とくに変わったとは感じていないのである。しかしながら，地域に継承されてきた，自然，環境に係った古くからの雨や風についての俚諺等を知っており，雨降り時に先ず考えることは，畑作そのものであり，雲の流れ，風向きと，天候の変化の結びつきや，野生動物の行動と天気予兆についても詳しい。

インフォーマントのライフヒストリーにおける自然認識，ライフ，サイクル（人生）にみられる価値認識は，まことに多様であるが，「自然」を教えられた体験のあるという事実は明らかに，他のインフォーマントとの認識の違いをもたらす要因となったのではないかと考えるものである。鳥越の村落は歴史過程のなかで外部社会の影響を受けながら文化を形成してきており，人々の環境対応の影響も大きいのである。

学校教育と住民の環境認識の相関

鳥越村における子供たちの成長と発達期に極めて大きな係り合いをもった知識習得に，小・中を中心とした初等・中等教育があり，学校が，地域社会の住民各層に果たした教育文化面での，成果は，大きいものがある。と同時に，地域社会における共同体，社会生活や，血縁関係にもとづいた家族社会での学習も，とくに生活と直接的に結びついているだけに，環境への働き面では，きわめて大きいといわざるをえない。例えば，今日インフォーマントが試みている自家用野菜類の栽培であるが，その栽培技術や，知識の継承は，N氏の場合は，両親からまた，魚とりなどの技術も同様であったという。この場合両親からは，「自然」そのものについても教えられることがあった。一方，S氏・M氏についてみると，民俗習俗などは，村の古老から学び，動・植物知識，自然知識，そして対応ついては，父親からのインパクトが強いとしている。

日常生活のなかでの自然知識や自然対応が，父親から技術を習得しているとするM氏の場合大日川での魚とりや遊びなど幼年期の体験もまた，自然を知り，利用する術の学習と理解し，「技術」習得は，友人からであるとのべていた。しかしながら，このような，家庭における両親・父親との幼年期の係り方は戦前と戦後の社会構造の変化，村落自体の過疎化，そして，都市化による文化流入の激化による家族関係の変化とともに，村落における幼年者の減少，学校教育の高度化，多くの要因によって家族内の両親と子供のコミニュケーションの断絶，生活自体の現代化による物質観念の変化とも係った共同体感覚の衰失が，子供たちの生活上の精神構造にも変化をもたらしてきたのである。今後，各世代ごとの自然認識および，自然観の収録が，増加し，分析が進められるにしたがって環境変化の

写真6　自家用栽培の野菜の手入れ（鳥越村にて）

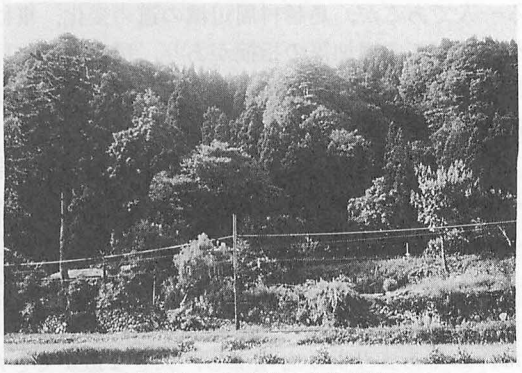


写真7　上吉谷の自然景観

具体的な住民への影響についても明らかにすることが可能となるに違ない。しかしながら，特別に「自然」について教えられたことはないというK氏の場合もある。彼は，自らの学習を強く意識していたのである。インフオーマントは，いずれも教育者としての体験を長きにわたって有しているのであるが，少年期における日常生活においては，当時の小学生たちが，体験した草刈，薪とり等，家庭の農作業，家畜の飼養等への労働作業を行ってきており，学校もまた，このような生活にくみこまれた自然接触を背景とした子供の労作業の性格をよく理解しており，これに対応していたのであった。聞き取りにより，鳥越村における戦前，大正末期，昭和初期における少年少女期の生活体験と，自然対応の記録について，各村ごとに記憶の記録化ができたので，今後は，これまでに村史等がとりあげて解明した「民俗」研究上の成果と関連して自然意識の変遷過程を，学校教育の展開とともに考察を進めたいと考えている。

鳥越村をふくむ白山麓一帯は，八幡社が多く存在し，注目されるのであるが，八幡宮が北九州発祥のものであり，奈良期以降の国家的権力による働きかけが強く影響しているとされ，この八幡の語源がヤハダ（焼畑）であるとも考えられてきた（鳥越村史編纂委員会,1972)。農耕の拡がりと係った八幡信仰のひろがりは，地域の開発を進めるのに大いに役立ったものと考えられる（萩原,1988)。鳥越地区に関しては，その地形上の制約からせっかくの手取川が，流れながらもその水位が低く用水利用が困難であった。そのため小さな谷川の水や，池・沼を利用して小田を耕作していた。この地形のせまさからくる住民生活への制約は，農作業面にもあらわれるが，住民教育に関する限り，藩政期にはじまった寺小屋における習字，読書，仏典等の学習が早期学習として位置づけられよう。明治期の小学校教育に綴方，習字，修身，算術，養生法などに加えて，地学大意といった環境学習が含まれてきていたことは注目されるのであるが，明治期の34･5年には，理科が，高等２年以上で学ばれるようになるのである。「農民鑑」が百姓のために講義されたという寺小屋時代における鳥越村の教育はユニークなものであったものの，鳥越地方は，山深い地，交通不便，生産の乏しい中での住民は，生活すべてに追われ，子弟教育に充分対応できなかったと村史はのべているが，自然に生きる農民生活の中に継承された技術や知識は決して低いものとはいえないのである。

表３　現代における鳥越村経営農耕地の推移と農用機械

経営耕地の推移　（単位：ha）

年　次	経営耕地総面積	田	畑	樹園地
昭和35年	573	464	108	1
40	555	481	74	－
45	545	494	50	1
50	529	472	56	1
55	510.4	475	35	0.4

資料：農林業センサス

農用機械（S55. 2. 1現在）　（単位：台）

区　分	動耕うん力機	乗トラクタ用	動防除力機	動田植力機	バインダー	自コンバイン脱型	米乾麦燥用機	バクーラー
個人有台数	531	137	603	292	329	239	168	2
共有台数	10	5	3	17	6	19	3	－

資料：1980年世界農林業センサス

教育の近代化と共に，都市型市民形成の一端をになう，中央政府，文部省による国民教育が急速に発展するのであるが，むしろ今日見直されねばならないのは，各家庭，共同体内において，自然や環境に働きかけた，地域ごとに形成されていた生活学習，自然利用学などにみられる定着化し，日々改良化のはかられた知識や技術の蓄積ではないかと考えている。

鳥越村域の調査によって，いかに教育者がその間の実践をふまえ，村民の日常生活の充実と係って

教育の実践を進めたかを知ることができたことは幸いであった。

児童生徒の家庭労務の分担と，学校授業とを有機的に結びつけ，教科書指導と現実の生活とを強く結びつけた学校教育の実践については，稿をあらたにして明らかにする。

上吉谷・河原山地区の戦前の児童作業

上述のごとく，鳥越村における児童・生徒の教育と係ったインフオーマントである教育者の具体的な生活体験は，鳥越村全域におよぶ調査の終了後に明らかにしたいと考えているが，本項においては，インフオーマント3名に限定して，大日川，および手取川流域におけるインフオーマント自身の少年期の自然接触，遊びや労作業を以下に考察する。川に対する認識や，関心をとりあげてみても，成人になるに至って変化していることが，伺える。インフオーマントたちの幼年期における自然・環境への関心は，草刈の草のはえ方，刈量，多量の繁茂地であり，それぞれに科せられた採取量そのものにあった。ノルマは草刈りが終了しないと晩飯にありつけなかったという日常作業や，お盆や祭り休みへの前もっての備刈りなどにも見られるが，草地のあるなしや，そこでの草の育成の違いなどに，他村の子供たちとの違いなどの比較を試みたりしているのである。鳥越村から対岸の吉野谷村の長い丈の草の生えている場所へ，上吉谷の子供たちは，わざわざ下吉谷まで出かけて行って，橋を渡って草刈り遠征を行なっており，このような草刈りの適所については，親から聞いたり，親と共に出刈りにでかけたりしたのである。子供の頃の記憶の一つとして，たえず空腹であったという体験や，また身体的に太った子供のいなかった点なども指摘されているのであるが，とくに草刈りについては，草刈り篭一杯，盛り上げの採草に関しては，インフオーマント個々の体験・評価がことなっていたのであるが，子供たちの親が，うまく子供たちの心理を察して，それぞれの労働を課していたのである。このような，子供たちの家庭内労務としての草刈りの減少は，戦後の農薬散布と，自動耕運機の導入による，牛・馬類の家畜飼育の減少が原因であるとされているのであるが，牛・馬の飼育にみられた経済効果をめぐっては，“馬では金を払い，牛では，金が入る”といわれており，牛馬の飼育に係る飼育には，とりあつかわれ方の違いがあった。馬の飼育が，借り賃を払われなければならなかったのにくらべて，牛の飼育は，後に現金が入るので喜ばれたことを，インフオーマントは，子供の頃の記憶の一つとして伝えている。この家畜飼育のために不可欠なのが草刈りであったのである。インフオーマントは，いずれもが，刈草の植物名をあげることはなかったが，牛馬の食事については，弁別を正しく行っており，牛が，毒草をさけて採食するということを知っていた。

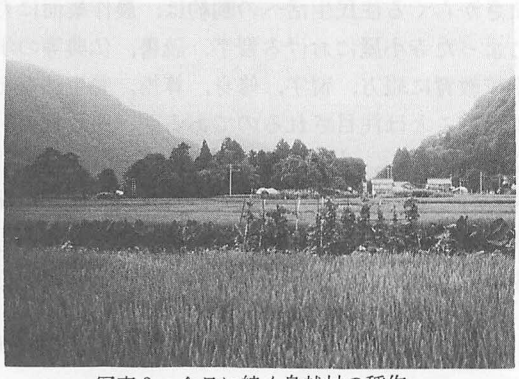


写真8　今日に続く鳥越村の稲作

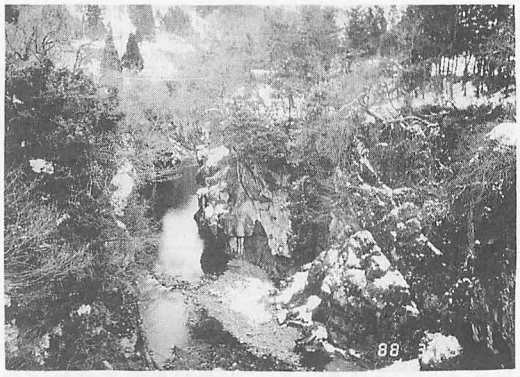


写真9　鳥越村と吉野谷村をへだてる手取渓谷

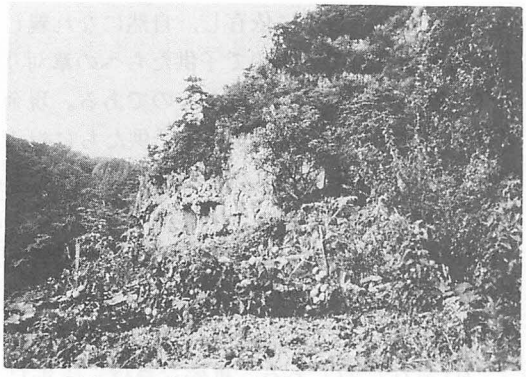


写真10　子供たちの往時の草刈場（下吉谷）

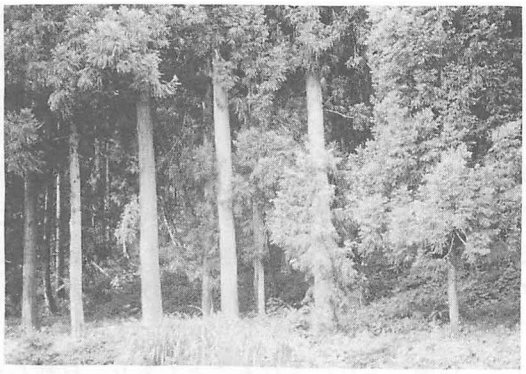


写真11　里山の植林地（鳥越村釜清水）

春のタキギ取りもまた，子供たちに与えられた労作業であるが，生木の採集は，とくに禁じられていたのであり，したがって，子供仲間でも“生が入っている！”といって相手をたしなめたり，なじったりしたのである。一方，立ち枯れの木は，どれほどもっていっても，叱られることはなかったという。自然物に接する対応や，それをめぐる社会内規制少年期のそれぞれのインフオーマントにも浸透していたといえよう。

社会構造の急激な変化に対応していった学校教育の担当者の立場をもつインフオーマントたちの少年期を，ふりかえっての共通の問題としては，物・心・ともどもにわたる価値認識の相違の著しさを無視できないのである（大橋保夫編,1979)。

自然観変遷の考察

1987年8月7日，鳥越村では，教職歴のある古老4名から，そして，8月9日～10日には，吉野谷村において，古老2名からのそれぞれの聞き取りをおこなったのであるが，以下においては，鳥越村の昭和初期に児童期を送ったこれ等インフオーマントの自然環境との係りあいについて，また，家庭生活をふくめた村落内社会生活について，その自然観の実態をめぐり若干の考察をおこなう。

写真12　昔話を語る村人（鈴木勝弥氏）鳥越村釜清水にて

自然観の現われは，インフオーマントの言動のなかに見い出されるのであるが，ここでは，個別アンケートのなかにも，自然に対する意識を，抽出することができたのである。鳥越村高齢者たちが，子供の頃は，“学校は，勉強するところ，家は遊ぶところ”と言われるように，学校 と，家との間に明確な役割の違いがあったのである。学校と家との間の通学道，とくに帰り道は，道草を食うところであった。またそれは，野生の動・植物や昆虫等との接触がなされ，自然との触れ合いのできた空間でもあり，新たなものの発見の場でもあったのである。家に帰れば子供たちは，暴れ川と呼ばれた大日川での水泳やゴリ取り，魚つり，野山での苺，アケビ，木の実などを含むさまざまな野生のたべものを採食していた。子供たちは，

山遊び，様々な道具づくりなどを体験し，自然を畏敬しながらも，自然に依存し，自然になれ親しんできたのである。先述したごとく，大抵の農家では牛や馬を飼育していたので子供たちへの草刈りが日課とされていたが，おこたると家にも入れてもらえない厳しいしおきもうけたものである。現金収入の乏しい生活のなかでの小遣い銭をめぐる思い出が多く記憶されていた。とくに子供たちに対する親の態度は，コミュニティーを維持する上でも重要であった。日常生活のなかでの役割りの分与もその一つであるが，親たちからものを大切にすることの重要性や，責任感などを植えつけられたのである。祖父母などからは，“他人に迷惑を掛けるな”“泥棒をするな”などとしばしば言われて育ったのであり，世間体を重んじ，世間の目を気にする態度を学ばされてきたのである。

子供たちは，年長と年少との間には，明確な上下関係があり，各自が立場をふまえた行動をしなければ，仲間はずれにされることもあり，自制心がうえつけられたのである。重要な点は，子供たちは，自己の年令に応じた行動様式を子供の世界の中で身につけ，家族の間では，農作業や，人づきあい等を体験することによって大人の世界へ移行をしていたのである。子供たちが，いたずらをすれば，誰かれの別なく，注意をして，そのようなことも親たちも容認したのであり，このことは，共同体のメンバーである村民全員によって見守られていたことを示すものである（根岸,1980）。

お　わ　り　に

鳥越村内に流れる二河川流域の住民間にみられた動物，および自然への対応のなかにみい出すことのできた価値認識は，環白山麓帯各村落におけるそれぞれの村落とは自然知識や自然物への関心の有無においての差異として現われる。本論では，川に沿った村落間においても，上流域，下流域住民間では，環境意識の違いがみられている。それは，上流，下流，また，山側，渓谷側との間においても環境への働きかけの歴史経過が問題となっている。学校教育においても教育内容の高度化が著しく，インフオーマントは，少年期の知識理解へは，多くの疑問を有していた。

表４　1987年鳥越村調査地

自然接触や集団あそびの減少のもたらす自然知識の低下が，社会にどのような影響をもたらすかについて強い関心を寄せているのであるが，自然から学ぶ非能率的な学習は，低く評価され，教科書，映像，活字メディアによる教育の能率化とは，やはり，対立しがちである現状が話題となってきた。すでに明らかなごとく鳥越村住民の意識の底流を明らかにする試みが始められたのであるが，「物」「実物」「環境」そのものからの具体的，体験学習は，手間も，時間も，経費も多く必要となれるという関心からのおくれが，今日ますます，鳥越村内の人間形成に何らかの影響をみせはじめているのではないかと考える。今後とも，村内，各地域毎にみられた世代間，生業間，性別，ライフ・ヒストリーの形成などを通じて，明らかとなったアニマルロア（動物伝承）と住民生活における自然観の変化を考察する。

本論は，白山自然保護調査研究会の調査研究費の支援をえた。ここに記して感謝の念を表したい。

なお，地元教育長，教育委員会，退職校長他，多くの教育関係者のお力添えを得ることができた。研究協力者である藤田喜作教育長，吉野谷村，山本重孝氏はじめ御力添えをえたすべての方々に深甚の謝辞を呈します。

写真13　鳥越村行政の中心鳥越村役場　1987年

参考文献

千葉徳爾（1986）近世の山間村落，名著出版
石川県立郷土資料館（1973）　白山麓民俗資料緊急調査報告書
岩田憲二（1986）白山の自然誌7－白山の出作り，石川県白山自然保護センター
松山利夫（1986）山村の文化地理学的研究，　古今書院
鳥越村史編集委員会（1972）石川県鳥越村史
石川県白山自然保護センター(1988)　白山麓自然環境活用調査報告書
文化庁編刊（1971）白山を中心とする文化財
若林喜三郎監修（1970）石川県の歴史，北国出版社
吉野谷村物語編集委員会（1984）吉野谷村物語，能登印刷KK出版部
岡谷公二（1987）神の森，森の神，東書選書
中村禎里（1984）日本人の動物観
広瀬　鎭（1979）猿，法政大学出版局
————(1981)中宮（石川県吉野谷村）におけるニホンザル伝承にみられる自然観の変遷，石川県白山自然保護センター研究報告第7集，p.41-54
————(1984 a)白山麓・石川県石川郡白峰村におけるニホンザルの民俗伝承の考察　石川県白山自然保護センター研究報告第10集，p.121-131
———— (1984b)ニホンザル伝承と白山麓吉野谷村下吉野にみられた地域住民間の自然・動物観，石川県白山自然保護センター研究報告第11集，p. 69-77
———— (1984c)アニマルロアの提唱，未来社
————(1986)石川県石川郡鳥越村にみられる哺乳動物と住民生活の自然史，石川県白山自然保護センター研究報告第13集，p.79-84
栗本慎一郎（1984）経済人類学の眼，青土出版
宮田正史（1987）文化人類学，福村出版
萩原秀三郎（1988）目でみる民俗神
根岸謙之助（1980）しつけと遊びの民俗，桜楓社

Summary

Torigoe-mura village, is now in state advancing mordernization since 1986 and author has been tried to collect villager's informations of the cognition through hearings.

Already anthor could disclose attitudes towards animals among people of Torigoe districts. Residents had various minds and attitudes towards animals, about monkey, bear, fox, raccoon dog, weasel and others.

Animal lores and folk lore in Torigoe were so much characteristic in conception with nature that author inspected and analized traditional feelings of villagers through enquete and interviewing informations.

It was important to find out historical changes of environment of Torigoe district, especially also to find out value of nature, which were originally formed by residents.

Relation between school education and environmental education among residents were examined by author. Then it was found finally the basic attitudes twords nature among people in Torigoe-mura.

Author disclosed gradual change of minds for nature among people in Torigoe for those 50 years. Afterwords, author now is trying to inspect cognitions for nature among each differelnt generations, sexes, occupations, and groups at along side of river in Ishikawa Prefecture.